

論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号

氏名 中村 文紀

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授

文学研究科委員

井上 逸兵

副査 京都大学大学院人間・環境学研究科教授

谷口 一美

副査 英国エディンバラ大学教授

ニコラス・ギズボーン

(Nikolas Gisborne)

学識確認 井上逸兵

論文題目 The Development of the Copulative Perception Verb Construction in English:

A Corpus-based Approach

(英語における連結詞的知覚動詞構文の発達:コーパスに基づく調査)

本博士論文は、英語に存在する連結詞的知覚動詞構文(Copulative Perception Verb Construction、以下 CPVC)の近代英語における発達を、電子コーパスを用いて調査、記述し、主として認知言語学の観点から言語表現の拡張、創発の事象としての説明を試みるものである。

連結詞的知覚動詞構文とは、その中で知覚動詞が連結詞の*be*動詞のように振る舞う構文

であり、以下のような性格を持っている。

(i)主語が知覚者ではなく知覚対象である

(ii)活動動詞として通常用いられる動詞が状態動詞として用いられている

(iii)補語の生起が義務的である

など特異な性質を持つことから言語学の様々な分野で研究が盛んに行われてきた。しかしながら。とりわけ上記(i)、(ii)については、一見合理性を欠いた、いわゆる感覚的に慣用化された表現群として統一的説明を得るまでの詳細にして大規模な調査は行われてこなかった。本論文は、この構文を文法化の観点から統一的に説明しようと試みると同時に、構文の高頻度性ゆえに変化し続けることによって生み出される言語の創発性への新たな知見をもたらすものである。

本論文の構成は以下の通りである。

1. Introduction

1. 1 The Aim and Scope of the Current Study

1. 2 The Position of the CPVC

1. 3 The Typology of Perception Verbs

1. 4 The Organization

2. The Synchronic Description of the Copulative Perception Verb Construction

2. 1 The Purpose of This Chapter

2. 2 Prototype Categories

2. 3 Prototypes of the CPVC

2. 4 Gradience of the Subject, the Verb, and the Complement

2. 5 Verbs in the CPVC

2. 6 Complementation Patterns

2. 7 CPVs as Active Predicates

2. 8 Related Verbs and Constructions

2. 9 Summary

3. Literature Review and Research Questions

3. 1 On Subjects

- 3. 2 On Aktionarts
- 3. 3 Diachronic Development
- 3. 4 Summary

- 4. Theoretical and Methodological Framework
 - 4. 1 Introduction
 - 4. 2 Grammaticalization
 - 4. 3 Other Mechanisms of Language Change
 - 4. 4 Evidentiality and Epistemic Modality
 - 4. 5 Subjectivity and Intersubjectivity
 - 4. 6 Data
 - 4. 7 Summary

- 5. On the Diachronic Changes in American English
 - 5. 1 The Purpose of This Chapter
 - 5. 2 Previous Studies
 - 5. 3 Data and Methodology
 - 5. 4 Results
 - 5. 5 Discussion
 - 5. 6 Summary

- 6. The Copulative Perception Verb Construction as a Comment Clause in Present-day Spoken American English
 - 6. 1 Introduction
 - 6. 2 Previous Studies
 - 6. 3 Data and Methodology
 - 6. 4 Results
 - 6. 5 Expansion as a Comment Clause
 - 6. 6 Summary

- 7. It looks that *it looks that* is possible
 - 7. 1 The Purpose of This Chapter
 - 7. 2 Previous Studies
 - 7. 3 Data and Methodology
 - 7. 4 Results and Discussion
 - 7. 5 Summary
- 8. Conclusions and Future Perspectives
 - 8. 1 Summary of the findings
 - 8. 2 Future Perspectives

<論文概要>

CPVCは具体的には以下のようなものが挙げられる。

- a. Mary looks happy.
- b. The plan sounds reasonable.
- c. The flower smells sweet.
- d. The cake tastes sweet.
- e. The cloth feels soft.

この構文は、形容詞から *as if* 節まで様々な補語をとることが知られている。変化し続けるCPVCであるが、先行研究では詳細に扱われてこなかった新たな用法が創発していることを、本研究の調査でコーパスを用い明らかにした。たとえば、保護となり得る *as if* と *like* は、従来、機能の面から同じであるという記述がなされてきたが、本研究では異なる分布をしていることを明らかにした。そのほかにも評言節(Comment Clause) として副詞的に用いられている事例や、従来非容認的であるとされてきた知覚動詞+*that* 節補語の例をとりあげ、新しく発達した構文が、コーパスを用いた量的分析によって詳細に説明することが可能であることを示した。このような分析は、基本的に用法基盤モデル (Usage-

Based Model) と理念を等しくするものであり、トップダウン的な論考では明らかにできなかった、言語におけるより包括的な知覚の理解へとつながるものである。

以下、本論文を構成する8章の概略を述べる。

第1章では、上記の本論文の目的を提示し、本論文で扱う CPVC が類型論的に知覚動詞群における位置づけを論じた。

第2章では、CPVC の共時的な記述を行い、この構文が単一的な構文カテゴリーにとどまらず、家族的類似性に基づくネットワーク構造を示すことを明らかにした。そのネットワークの発達が通時的な経路をたどり、今なお新しい変化が生じていることを示した。

第3章では、CPVC を扱った先行研究を批判的に検討した。前半は、構文を構成する主語、動詞、補語の観点から先行研究をとりあげ、後半では、CPVC の通時的な分析の代表例として、Taniguchi (1997, 2005), Gisborne and Holmes (2007), Whitt (2009, 2010, 2011) を取り上げた。従来の研究では、構文の成立や意味変化に焦点が当たっており、扱っている時代も比較的古い時代であることを踏まえ、言語変化を視野に入れた記述が必要であることを論じた。

第4章では、本論文で用いる理論的・方法論的枠組みを説明する。本論文は基本的に用法基盤モデルの分析理念に基づき、文法化とその他の言語変化に用いる理論を援用している。また、類推による変化と(間)主観化という2つの意味変化に関する議論が後半の事例研究では多く用いられている。

第5章では、CPVC が定形詞節を補語としてとるようになった発達に関与した要因を考察する。先行研究では、新しい補語パターンを獲得する場合、*seem*, *appear*の補語パターンを類推によって得られたことが指摘されている。これは、*look*などの知覚動詞が *seem*と同じくモダリティ的な意味を獲得したことが引き金になっている。しかし、実際に *seem*の影響でCPVC の補語パターンに影響を与えたかを明らかにする実証的データ分析は過去にない。このギャップを埋めるため、アメリカ英語 1800 年から 2000 年代までカバーしている *Corpus of Historical American English* (Davies, 2008-) 「以下「COHA」」を用いて、この仮説を検証した。検証の結果、補文標識によって発達経路が異なることが明らかとなった。*as if(though)* の場合には、通時的に *seem* が *look* に先行しており、その後頻度が逆転している。これは、仮説通り *seem* の影響を受けてCPVCが補文を取れるようになったことを示唆している。

第6章では、CPVC が評言節(Comment Clause)として使われる用法を COHA に加え現代アメリカ英語の均衡コーパスである *Corpus of Contemporary American English* (以下「COCA」)から例を収集して分析を行った。CPVCの通時的な側面を扱った先行研究は、主に単文としての用法に焦点が当てられており、特にその構文としての成り立ちや

証拠性や主観性を得る過程が分析されてきた。しかし、評言節としての用法は、主節としての*look/sound like*が従属節から統語的・意味的に切り離されることで副詞節化する現象であり、これまで十分には研究されてこなかった。本章では評言節としての用法が確立する要因を論じた後、副詞化し幅広い要素と共起することから証拠性・主観性を継承しつつ、談話機能を備えた様相を論じた。

第7章では、もっとも新しい補語パターンである *it looks/sounds that* を考察した。この構文パターンは未だ多くの母語話者にとって容認可能ではないため作成基盤の研究では扱われて来なかった。近年のコーパス基盤、用法基盤での共時的な考察に加えて、通時的な発達を調査し、それを文法化・構文化の理論によって説明を試みた。この補語パターンは先行研究で言われてきたよりも古い時代から散発的に使われてきたことを明らかにし、容認性はあまり高くないが、表層形での語の近接性によっては容認度にばらつきがあることから基本型との直接的な対照が容認度に影響を与えていることを論じた。また、口語レジスタにおいて実例が見受けられることをとりあげ、口語での創造的な使用と談話機能についても論じた。

第8章では結果の総括とともに、言語学全体への貢献、将来的にありうる展開を論じた。

審査要旨

中村氏の博士論文の言語学への貢献、および独創性は、端的に言うならば、合理性、ルール制御の言語理論では統一的な説明が困難とされる英語の連結詞的知覚動詞構文を、認知言語学、用法基盤モデルのアプローチを用いて包括的な説明を成し遂げたところである。とりわけその文法化（副詞化、談話標識化を含む）のプロセスを、特に現代英語に焦点をあてつつ大規模データを用いて、ボトムアップ的に、かつ詳細に解き明かした論考は類例のないものである。この構文は高頻度に使われるがゆえに現代英語においても変化し続けており、コーパスベースの本研究によってこれまでの研究では十分には扱われてこなかった新たな用法が創発していることを明らかにした。言語の創発性に関わる議論としても高く評価できる。

議論の多くは、一見微視的で詳細にわたるものだが、その変化の経路に関わる議論は、相互作用的な創発性に有機的に関連づけられており、論考自体も秀逸なものである。例えば、アメリカ英語の *as if / like* の定型節の変化の議論において、多くの意味的共通性を持つ *seem as if* から *look as if* が類推されていることが確認されながらも、*look like* は *look like*[名詞句]という句からの派生と別の経路を辿っていることをつきとめ、*seem like* はむしろ *look* からの類推であることを明らかにし、*seem* と *look* が双方向に影響し合っていることを論じた。

中村氏の明らかにしたことを、単純化を恐れずに総じて言うならば、変化のプロセスは、

先行研究でいわれているよりも類推に基づく発達経路が複雑であることである。言語の発達が局所的な変化が累積することで起こることを明らかにした。たとえば、*as if*の生起環境では同様に *like* も生起するという合理的とも言える互換性は認められず、特定の文脈における定着がそれに先行することや、補文標識の選好については動詞ごとのばらつきが大きいことを明らかにした。また、認識様態動詞である *seem* と *appear* と、元来知覚動詞である *look* と *sound* という異なる起源を持つ動詞群が、異なる経路に辿った結果、共通した形式と機能を持つに至っていることを明らかにした議論とその事例は、カテゴリーの創発についての核心的な議論となっており、かつ有意義な形でデータを提供しているという意味でもこの分野における貢献度が大きい。

また、当該の構文が定形節を取るに至った後の変化に関する議論についても、例えば、*it looks like* が評言節 (Comment Clause) として発達をとげた経路も説得力をもって論じられている。CPVC の通時的な側面を扱った先行研究は、主に単文としての用法に焦点を当て、特にその構文としての成り立ちや証拠性 (evidentiality) や主観性を得る過程が分析されてきた。しかし、本論では、評言節としての用法を、主節としての *look/sound like* が従属節から統語的・意味的に切り離されることで副詞節化する現象としてとらえ、これらが文としての用法の後に生じているために近代英語、現代英語としての研究例が少ないなか、そのギャップを埋める橋渡しとなっている。

CPVC は先行研究では *that* 節との関わりでの議論として、*it looks/sounds that* という構文パターンは、未だ多くの母語話者にとって容認可能ではなく、作成基盤の研究では扱われて来なかった。本研究では、コーパスベースの通時的な発達の調査をもとに、それを文法化、構文化の理論によって成功裏に説明した。この構文パターンは先行研究で言われてきたよりも古い時代から散発的に使われてきたことを取り上げ、特定の統語環境に強く依存して発達してきたプロセスを明らかにしたことも、大きな貢献である。

本博士論文全体として、大規模コーパスを用いてこれまでにない程の精緻な調査を行い、用法基盤モデルをより深化させ、言語変化が抽象的なレベルで起こるものではなく、高度に統語環境に依存した細やかな変化の累積によるものであるという変化の創発に関わる壮大にして精緻な主張がなされている。この議論は、現在進行している発達も捉えうる発展的な用法基盤のモデルを提示することにもなっており、現代英語の比較的短い期間の変化をも捉えうることも示唆している点で、画期的で意義深い論考となっている。

ただし、細部については、問題がないわけではない。証拠性の議論については、その概念が従来のこの分野の研究での取り扱いと若干異なっているところがあり、英語では文法化されてないとの見解が一般的である以上、より十分な定義に関する議論が必要であったように思う。また、*look like* [名詞句] の分析では、[名詞句] にあたる名詞が、もの (object) 的なものからこと (event) 的なものへと移行する変化があるというように事象にも着眼すれば、より有意義な議論になったと思われる。全体として、現代英語の研究としての限界ではあるが、通時的な側面に議論を展開してもよかったところがとりあげた以外にもあった。中村氏が指摘しているように、古い構造が新しい構造と並んで存在しているという点でのレイヤリングがあり、そのため、いくつかの構造が曖昧になっている。このレイヤリ

ングと文法化のプロセスがどのように機能するのかを、中英語の *methinks* のような他の類似した例と照らし合わせて探ってみてもよかったと思われる。

以上のような改善の余地はあるものの、総じて中村氏の論考は秀逸なものであり。その独創性、貢献度もきわめて高いものである。精緻で、柔軟な議論は中村氏の研究者としての今後のさらなる発展を確信させるにあまりあるものであり、この分野における今後の貢献も大いに期待させるものである。以上のことから、査読者一同は、中村氏の本論文が博士号（文学）を授与するにふさわしいものと判断する。